

読解基礎トレーニングシート 作文講座①／雪は天からの手紙

★次の文章を読んで、雪にまつわる思い出や、雪に対するイメージを、二百字以内の文で書いてみましょう。

「雪は天からの手紙」という言葉があります。世界で初めて人工的に雪の結晶けつしょうを作ること成功した中谷宇吉郎なかやうきちろうという科学者の言葉です。雪は紙ではないし、文字が書かれているわけでもありません。それなのに、なぜ手紙だといつのでございようか。

雪は高い空の水蒸気すいじょうきがおおって結晶けつしょうになったものですが、雪になる時の水蒸気すいじょうきの量、地表からの高さ、風の強さ、温度や湿度しじつどなどのちがいによって、結晶けつしょうの形がかわります。空からふってきた雪の結晶けつしょうを調べることで、高い空でどのようなようにして雪の結晶けつしょうが固まったのかがわかるのです。雪にふれる機会があったらぜひ雪の観察をしてみてください。高い空からふってきた雪が、あなたに何かを伝えてくれるかもしれません。

雪にもいろいろな種類しゅるいがあることを知っているでございようか。重くしてめったボタン雪、軽くてさらさらした粉雪、丸いつぶの形の粒雪つぶゆき、ふわふわした綿雪わたゆきなど、雪国ゆきくにでは他にも色々な名前の雪があります。そして、その雪の結晶けつしょうの形にもいろいろな種類しゅるいがあり、見くらべてみるととても美しく、見あきないものです。

中谷宇吉郎は「空からふってきた雪の結晶けつしょうを地上で受けとってみると、結晶けつしょうが空の様子を教えてくれているようだ」と感じ、雪の結晶けつしょうを写真で集めて研究したのです。「雪は天からの手紙」とはロマンチックな言葉ですが、実は科学的な言葉でもあるのですね。

【ワークシート】

①雪にまつわる思い出をあげ、そのときの様子や自分の気持ちをまとめてみましょう。

②雪に対するイメージを自由に書きかきましょう。

読解基礎トレーニングシート 作文講座②／読み間違い

★次の文章を読んで、あなたが間違えて読んでしまったことや、言い間違えてしまったこと、かんちがいをしていたことなどを、二百字以内の文で書いてみましょう。

ある夜遅く家に帰ってみると、リビングのテーブルに中学生になった長男の学年通信が置いてあったので、手に取って読んでみることにした。その学年通信のタイトルが「狸」！なぜ「たぬき」なんだ？ そういえば近所の藪にたぬぎが住みついていると話題になっていたな、それとも担任の先生のあだ名（ニックネーム）なのか、など思いつく記事を読み終え改めてタイトルを見直してみると、「狸」ではなく「理」であった。たしかに「狸」と「理」の字は形がにている。さすがにたぬぎじゃないよな、なるほど「理」ことわり「か」「ことわり」とは物事の真実や本質、正しくまちがっていないものなどを表すことばであり、学年通信のタイトルにふさわしい。「狸（たぬぎ）」とつけるわけがないだろうと、自分の読みまちがいに気がつき、おかしくなってしまう。

【ワークシート】

①間違えて読んでしまったことや、言い間違えたこと、勘違いをしていたことなどを書いてみましょう。

②そのとき、周りにいた人（友達や家族）の反応や、あなたがどんな気持ちになったかをまとめてみましょう。

★次の文章は『奥の細道』の冒頭部分の現代語訳とその解説です。この文章を読んで、旅（旅行に）まつわる思い出や、貴重な体験・感動したことなどを、二百字以内の文で書いてみましょう。

月日は永遠に続く旅のよう、古い年も新しくやってくる年もまた旅人と同じである。船の上で生涯を過ごす船乗りや、馬引として年をとっていく人は、毎日が旅であって旅を住みかとしている。

昔の人も、多くの人が旅をし、そこで亡くなっている。私もいつのころからか、一片の雲が風に流されるように、漂泊の旅をしたい気持ちをおさえることができず、海辺をさすらい、去年の秋に川のほとりの古い家に戻り、モの巢をほらい、腰を落ち着けたが、年もくれ春のような霞の空を見ると、「白河の関をこえたい」と、そぞろの神が取りついて気持ちをおさえることができず、道祖神が私を招いているようでもなにも手につかない気持ちになった。もも引きの破れているをつくり、笠のひもを付け替えて、三里（足のつば）にお灸をすると、松島の月がどのようになっているかと心にうかんだ。住んでいた家は人に譲り、（弟子の）杉風の別荘にうつり、『この古びた自分の家も住人が変わることになる。雛人形が飾られる家になるだろう』という句をよんで家の柱に掛けておいた。

〈解説〉

奥の細道は江戸時代の俳人、松尾芭蕉が弟子の河合曾良と江戸を出発し東北へ向かい、岩手県の平泉から日本海側を南下し、岐阜県大垣に到着するまでの旅の記録を記したものです。折々で俳句を詠み、誰もが一度は聞いたことがある俳句がたくさんあります。

この冒頭は、「流れる雲のように旅をしたい。今の家に落ち着いてはみたが、今度は奥州（東北）に行ってみたいという気持ちになった。だれかによばれている気持ちになり、何も手につかなくなってしまう。色々と旅の準備をしてみると、松島の月はどうなっているかが気になる。旅に行くのでこの家は人に譲ることにした。『今度この家に住む家族には女の子がいて、ひな人形が飾られるだろう』という俳句を柱にかけた」という場面です。

ひとつの場所にとどまることをせず、旅のなかで日々を過ごすことを選んだ芭蕉の人生をあらわしたものです。実際に芭蕉は生涯のほとんどを旅の中で過ごしました。

【ワークシート】

①印象に残っている旅行を思い出しましょう。

②どんな旅行でしたか。（旅行の目的等）

③思い出や、貴重な体験・感動したことをまとめましょう。

④その旅行がもたらしてくれたことなどを考えてみましょう。